

明治期の兵語辞書について（五）

ドイツ語を中心にして

信 岡 資 生

9 獨和兵語辭典

1

陸軍教授で文学士の藤井信吉が編纂した『獨和兵語辭典』は、前々回（三）（『成城大学 經濟研究』第 165 号）で取り上げた『7 最新獨和兵語辭典』（兵藤三郎著 兵事雜誌社 明治 42 年）の刊行より 2 年後の明治 44 年 12 月に金港堂書籍株式会社より発行された。書名に「最新」の文字を冠した獨和兵語辭典のほうが本書に先行した結果となった。

現在国会図書館に収蔵されているものによって記述を進めると、大きさは縦 15 cm × 横 9 cm、厚さ 2.5 cm、濃茶色の革表紙で、扉には左から右書きで「獨和 兵語辭典」と 2 行、その下に「陸軍大將 公爵 桂太郎閣下題字」、さらにその下に「陸軍教授 文學士 藤井信吉先生編」、最下段に「金港堂書籍株式會社 發行」と記載されている（図 1）。

ここには独文タイトルは記されていないが、本文第 1 頁に、記述に先立ち冒頭に 3 行にわたって独文のタイトル Neues / Deutsch-Japanisches / Militärwörterbuch がドイツ文字で掲げられている（図 2）。これによれば「新獨和兵語辭典」である。

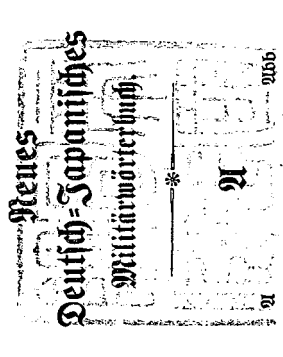
桂 太郎の題字は「知彼知己百戦不殆 太郎 題」との墨書である（図 3）。「彼を知り己を知れば百戦して殆^{あや}うからず」で、出典は『孫氏 謀攻編』より、敵味方双方の実力をよく知って比較検討の上戦に臨めば間違い

なく百戦百勝できる、の意である。桂 太郎は、弘化4年(1847)萩の生まれ。明治新政府に仕えて維新後の奥羽平定に功績を挙げ、長州閥の陸軍内部での地位を築き上げていった。明治3年から6年にかけて兵制研究のためベルリンに留学、明治8年から11年まで獨逸駐箚公使館付武官となり、明治17年軍制改革のため大山 巖陸軍卿と欧州各国の兵制を視察した彼は、先に「5 獨和兵語辭書」で述べたように（『明治期の兵語辭書について（二）』『成城大学 経済研究』第163号124頁）、陸軍の兵制をそれまでのフランス式からドイツ式への切り替えを断行した。その後明治31年陸軍大臣、明治34年6月には内閣総理大臣となり、日露戦争の開戦とその收拾に当たった。明治39年1月いったん辞職するが、明治41年7月再び首相となり、本書刊行の直前の44年8月までその任にあった。彼はその後也大正元年12月三度目の首相となるが、翌年憲政擁護運動の批判を浴びて辞職、同年病没した。

これに陸海将官の序文4篇が続く。いずれもドイツ軍の世界に優れていることを挙げ、ドイツ軍事の研究が日本の軍隊にとって急務であることを説いている。まず海軍大将樺山資紀である。

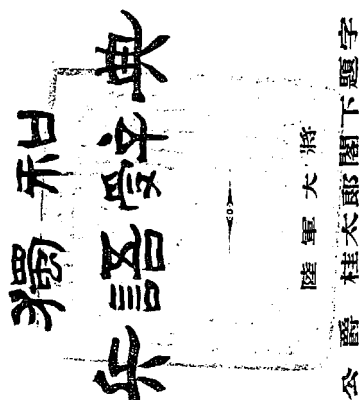
序

宇内に戦鬪の絶えざる間は、兵器戦術の研究は、一日も忽諸に附すべからざる也。獨逸陸軍の優越なるは世間自ら定論あり。其海軍の如きも英米に次ぎ、且益其勢力を擴張せんとす。況んや本邦陸軍は、範を獨逸に取れるをや。獨逸軍事の研究は、實に急務中の急務なり。而して軍事研究の津梁たり、筌蹄たるものは、術語に關する原語の明確なる解釋是也。陸軍教授藤井信吉君、獨逸語の造詣殊に深く、教務の餘暇歩騎砲工衛生及び海軍に關する用語貳萬六千四百餘字を集めて、一字書を作り、名つけて獨和兵語辭典と云ふ。凡そ兵學に關する文字は、博搜旁羅せざるはなし。其解釋亦穩當にして、實用に適せり。兵



ab!, 立テ;
 abbeuern, *m.* 撤去, 驅レ家
 abbefleht, *v.* 命令ヲ取消ス, 改令スル
 abberufen, *v.* 召還スル
 abbiegen, *v.* 折進スル, [騎] 頸ヲ屈轉スル;
 die Pferde rechts (links) —!, [騎]
 右(左)ニ馬ヲ曲ゲ
 — *n.* [騎] 頸ノ屈轉
 abbieten, *v.* 敵兵ニテヲ追却ヲ聽令スル, 掃除ノ
 爲メニ火藥ノ少量ヲ砲身ニ燃ヤス
 abbilden, *v.* 艦船ノ燈光ヲ遮蔽スル
 abböhren, *m.* 穿岩雖
 abböthen, *v.* 發射スル
 abbeghen, *v.* 分解スル, [騎] 項ヲ屈轉スル;
 die Brüste —, 橋梁ヲ破壞スル
 in kleinen abtheilungen —, 小部
 隊ニ分解スル
 zu Etrenn —, 一列ニ分解スル, —
 騎ニ隔ス

図 2



陸軍教授
 文藝士 藤井信吉先生編
 44. 2. 27
 内務省
 金港堂書籍株式會社
 發行

図 1

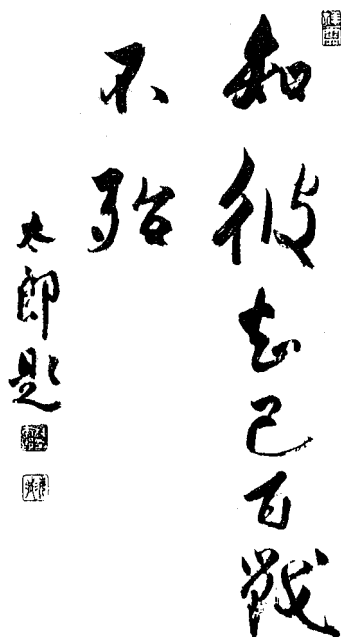


図3

器戦術に志あるの士は、之を以て師友とし、努力研學せば、其得る所蓋し鮮少ならざるべし。今や列國陽に平和を装ふと雖も、禍亂の勃發、其孰れの時に在るかを知るべからず。邦を寰宇の中に立つるもの、豈不測の患を慮らざるべけんや。聊^{いささか} 卑見を述べて序となす。

明治四十四年十月一日

海軍大將 伯爵 樺山資紀

序文注 文中ルビは筆者

忽諸（こっしょ）：おろそかにする

津梁（しんりょう）：橋渡し，手引き

筌蹄（せんてい）：目的達成の手段

博搜（はくそう）：文献を広く探す

旁羅（ぼうら）：あまねく集める

寰宇（かんう）：天子の統治する地，天下，世界

樺山資紀は天保8年（1837）鹿児島生まれ。西南の役では熊本鎮台参謀長であった。明治14年警視總監，陸軍少将に昇進したが，明治16年海軍大輔，翌年海軍少将となった。こうした陸軍から海軍への転任は軍の草創期にはよくあったことで，例えば西郷従道も陸軍中將から海軍中將へ転

任している。明治19年4月～23年5月海軍次官、23年5月～25年8月海軍大臣を務めた。明治25年にいったん予備役となったが、日清戦争で現役復帰し、海軍軍令部長（27年7月～28年5月）となり、功績により28年伯爵となる。29年9月～31年1月内務大臣、31年11月～33年10月文部大臣、38年5月海軍大将、初代台湾総督となり、同年11月予備役編入、大正11年2月歿¹⁾。

続いて陸軍少将大庭次郎の序文である。

序

山に猛獸あれば藜藿^{なり}之が為に採られず。國に軍備充實して寸地の侮を受くるなし。生存競争の世、軍備豈一日を忽にすべけんや。而して世界軍事の超絶せる者を獨逸とす。我國夙に範を之に取り、各兵科の操曲多く之に倣ふ。吾人は獨逸の兵事に學びて益其智識を進めざるべからず。陸軍教授藤井信吉君の獨和兵語辭典成る。其内容の豊富なる實に二萬六千有餘言と稱す。解釋の精確なる、形式の整備せる、又其他に類例を見ざる所なり。語の豊富なる、解の精確なる、形の整備せる等は、辭書の三要義を得たるもの、眞に會心の著となす。

君は獨逸文學を專攻して造詣あり。又幾多の獨和辭書を著して其譯語に精し。特に職を陸軍に奉じ、砲工學校にありて、斯學の研鑽に深し。官職の傍ら、本書の編纂に従ひ、旦暮孜々、茲に六年を費して此大成を見る。篤學の士にあらざれば能はざる所なり。

余は著者の學殖閱歷に信賴して廣く本書を推薦す。身軍職にあるものは勿論國民一般宜しく之に習熟して、國家の目的、軍隊の本領に於て、缺如なからんことを望む。

明治四十四年十一月

陸軍少將 大庭次郎

序文注 文中ルビは筆者

藜^{れいかく}：アカザの葉と豆の葉；転じて粗末な食べ物。因みにアカザは畑や荒地に自生する 1 年草でその若葉は食用になる。

操曲：軍事訓練の委細

旦暮：朝も暮れも、たえず

大庭次郎は、『日本陸軍将官辞典』（福川秀樹著 芙蓉書房出版 2001）をはじめとする軍関係の名簿では大場二郎と記載されている²⁾。元治元年（1864）山口県生まれ。陸軍士官学校から明治 25 年（第 8 期）陸軍大学を卒業、長州閥の寵児として特進、ドイツ駐在も経験し、日露戦争では第三軍参謀として旅順攻囲戦に出征、明治 37 年 2 月大本营参謀、明治 41 年 8 月戸山学校長、43 年 11 月少将となった。この後、大正 4 年 2 月中将に昇進、第三師団長となる。第一次世界大戦では観戦武官としてロシア軍に従軍、15 年 3 月予備役に編入となり、昭和 10 年 2 月歿³⁾。

さらに陸軍工兵大佐 近野^{ちかの}鳩三の序文が続く。

序

獨和字書の我國軍事界に必要なは、固より、予の喋々を要せざるなり。而して、既刊の字書は其陸軍の語彙に精なる者は海軍に粗にして、歩騎兵の術語に豊富なる者は砲工、輜重、若くは衛生等に於て簡略に失する弊あるを免れず。識者、常に、之を憾む。嘗て予が師事せし所の砲工學校教官藤井信吉氏、茲に、見る所あり。多年、公務の餘暇を以て、拮据勵精して、獨和兵語字書を著し、將に梓に上せんとし、予に其批評を請ひ、囑するに序文を以てせらる。予受けて之を閲するに、其語彙の豊富にして、陸海軍の別なく、歩騎砲工を論ぜず。殆んど、網羅せざるはなし。此の一事、直に以て、その出色の著たるを證するに足れり、況んや、其配列の整然たる、譯語の妥當なるなど、

いささかも

聊，遺漏なきに於てをや。之を完璧と謂ふとも，固より，誣言にはあらざるなり。其恩恵に浴するもの，豈，獨り，吾儕，身を軍籍に措くもののみならんや。予喜んで，其請に應じ，一言を巻端に序す。

明治四十四年初夏

陸軍工兵大佐 近野鳩三

序文注 文中ルビは筆者

聊(いささかも): 少しも

喋々(ちょうちょう): べらべらしゃべる

拮据(きつきょ): 忙しく働くこと

吾儕(わがせい): わがともがら，われわれ

近野鳩三は慶応元年(1865)熊本の生まれ，陸軍士官学校第8期(上記大場少将と同期)，陸軍大学第12期卒業で，日露戦争では二 三高地攻略に参加した。明治41年3月砲工学校教官，45年4月第17師団参謀長。この後，大正2年8月少将，7年7月中将に昇進し，8年11月予備役に編入されている⁴⁾。

最後に陸軍工兵中佐有川鷹一の序文となる。

序

維新以來我が軍事の革新は，英佛獨に負ふ所少からずと雖も，今日に於て最も多くの關係を有するは獨逸なりとす。されば軍人又は軍事に志あるものは，日獨間の智識を一層必要とすべきは，論を待たざるなり。そもそも此の智識養成は，彼我の言語に精通する事を以て，唯一なる條件とす。然れども元來言語には，各國固有の性質ありて，其の語彙を識る事のみにてても，容易の事にあらず。即ち我の此の語が彼の何たる語に相當するか，其の適譯を發見せん事は，至難の事たり。

何となれば、彼にあるものにして、我に無く、我にあるものにして、彼に無きものあればなり。普通語にして然り。況んや特殊の智識を要する専門語に於ておや。

兵語は或意味に於て専門語なり。同國人と雖も、之を知悉するは容易なる事にあらず。されば他國の兵語を、自國語に譯せんとする事は、甚だ難し。特に獨逸語は他國語に比して、文法上一層煩瑣なる約束あれば、之を適譯するは、至難中の至難といふべし。是れ獨和兵語辭典の必要なるにも拘らず、少數なる所以なり。予が知友文學士藤井信吉君は、夙に此を憂へ、我が砲工學校に職を奉じて以來約六ケ年、公務の餘暇孜孜として其の完成に勤め、其精力は今此の書に實現せられたり。試みに之を披見するに、一般兵語は固より、殊に砲工に關する語彙に於て、著しく其の數を増したるが如し。是れ其の苦心の存する所か。予は知友の成功を祝すると同時に、我等軍人若しくは軍事に志あるものは、此れによりて其の智識を増進して、益軍事發展に貢獻する事の多かるべきを歡ばざるを得ず。一言以て序となす。

明治四十四年十一月

陸軍工兵中佐 有川鷹一

有川鷹一は明治6年(1873)山口県生まれ。陸軍士官學校第6期卒業。この後大正8年4月航空學校長、陸軍少將。第一次世界大戰の青島要塞攻略に初の陸軍航空隊長として偵察・爆撃に出陣し、大正12年8月中將に昇進している⁵⁾。序文中に「獨逸語は他國語に比して、文法上一層煩瑣なる約束あれば、之を適譯するは、至難中の至難といふべし」とあるが、これはドイツ語の門外漢の間に流布する俗説というべきもので、有川自身にはさほどドイツ語の素養のないことを語るに落ちたと言えよう。

これら序文に続く著者自身のことばは以下の通りである。

緒言

明治年三十九年、余職ヲ陸軍砲工學校ニ奉ゼシヨリ、兵語研究ノ念起リ。遍ク兵書ヲ涉獵シ、一語ヲ得ル毎ニ之ヲ手録シ。拮据六星霜、漸ク此小冊子ヲ成スニ至レリ。之ヲ識者ノ目ヨリ見タランニハ、眞ニ遼豕ノ譏ヲ免レザルベシト雖モ、聊カ初學ニ裨益スルヲ得バ、實ニ望外ノ幸ナリ。其工兵ニ關スル事ハ、有川中佐ノ指導ニ待チシコト渺カラズ。茲ニ著作ノ由來ヲ述べ、併セテ中佐ニ對スル感謝ノ微忱ヲ表ス。

明治四十四年十一月

著 者 識

緒言注

遠家^{りょうし}：世間知らずのひとりよがり；遼東の人が白豚を珍重して、河東まで献上に行ったところ、そこでは白豚はありふれたものであって、恥をかいたという故事から

微忱^{びしん}：ささやかな真心、寸志

藤井信吉は東京帝国大学文科大学独逸文学科を明治 31 年卒業⁶⁾。明治 39 年より陸軍教授として陸軍砲工学校でドイツ語を教えた。本書の序文に近野、有川の両工兵佐官が名を連ねたのは、陸軍砲工学校時代の縁によるものである。陸軍砲工学校は明治 22 年開校、陸軍士官学校を卒業した砲兵と工兵将校に高度の軍事技術習得のための教育を施した陸軍のエリート養成機関で、普通学で外国語も教えた。その後軍の近代化に伴い、戦車・航空などの兵種も入学させるようになり、昭和 16 年から陸軍科学学校と改称した。

この辞書に先立って藤井信吉は登張信一郎と共著で『獨逸熟語辭典 Neues Wörterbuch der Deutschen Redensarten』(大倉書店 明治 38 年 11 月)を、また同じ金港堂書籍株式会社から単独で『二十世紀獨和辭書 Deutsch-Japanisches Wörterbuch des Zwanzigsten Jahrhunderts』(明治 40

年 5 月)と『獨和法律辭典 Neues Deutsch-Japanisches Rechtslexikon』(明治 43 年 4 月)を出版している。この中で『二十世紀獨和辭書』は、見出し語にアクセントを付して発音を示したこと、また綴り字に 1901 年 6 月のベルリンにおける正書法会議の結果を採り入れた我が国最初の独和辞書であることで注目に値するものである⁷⁾。

注

- 1) 『帝国海軍将官総覧』(太平洋戦争研究会著 KK ベストセラーズ発行 2002), 及び『陸海軍将官人事総覧 海軍篇』(外山 操編 ㈱芙蓉書房出版 1981)による。
- 2) 注 1) の『陸海軍将官人事総覧 陸軍篇』でも大場二郎である。
- 3) 『日本近現代人名辞典』(臼井勝美 高村直助 鳥海 靖 由井正臣編集 株式会社吉川弘文館 2001), 及び『日本陸軍将校総覧 別冊歴史読本 第 38(533)号』(新人物往来社 2000)による。
- 4) 『陸海軍将官人事総覧 陸軍篇』(外山 操編 ㈱芙蓉書房出版 1981)による。
- 5) 『日本陸軍将官辞典』(福川秀樹著 ㈱芙蓉書房出版 2001)による。
- 6) 明治 19 年 3 月 1 日よりそれまでの東京大学が帝国大学と改称。大学院及び分科大学を以って構成。分科大学の一つを成す文科大学は東京大学文学部の事業を引き継ぎ、哲学科、和文学科、漢文学科、博言学科の 4 学科を置いたが、翌明治 20 年 9 月 9 日に史学科、英文学科、獨逸文学科の 3 学科を増設、さらに明治 22 年 12 月佛蘭西文学科を増設した。明治 30 年 6 月京都帝国大学設置のため帝国大学は東京帝国大学と改称。大正 8 年 2 月 6 日勅令第 12 号を以って帝国大学令を改正し同年 4 月 1 日より施行、各分科大学がそれぞれ学部となったのである。以上『東京帝国大学五十年史 上下』による。
- 7) ドイツ語の正書法の統一については『明治期の兵語辞書について (三)』(『成城大学 経済研究』第 165 号 13~17 頁)で記述した。

2

著者の序文に続いて、本文に入る前に「本書所用略語解」の頁があり、以下の略字を掲げている。

adj. 形容詞 *adv.* 副詞 *f.* 女性名詞 *int.* 間投詞 *m.* 男性名詞
n. 中性名詞 *pl.* 複数 *pp.* 過去分詞 *prep.* 前置詞 *refl.* 再歸動詞
v. 動詞

[海] 海軍 [冶] 冶金 [騎] 騎兵

これによれば専門用語としては[海],[冶],[騎]の3つだけであるが、[海]としないで、(海軍語)と説明している箇所も見受けられる(例：**Troyer** ...*m.* 毛製ノ襦袢(海軍語))。またこれ以外にも発音を示すに *spr.* の略語を用いている。*spr.* は同著者の『二十世紀獨和辭書』の略語表 (Abkürzungen) によれば、*spr. -sprech(t).* (ママ) とある。

本文は1~786頁である。1頁1段組み、34行、見出し語はドイツ字体(本稿では印刷技術の関係からローマ字体で例示)でゴシック体、全部で約2万6千語(上掲の樺山大将の序文によれば2万6千4百余語)を収めている。兵藤著『最新獨和兵語辭典』の約2万語より若干の増加と言えようか。因みに同時代の一般独和辞典に収録されている兵語の語彙数は、例えば大型の独和辞典で『増訂挿図獨和辭典大全』(福見尚賢・小栗栖香平纂譯 明治18年6月初版 南江堂)では、その増訂第四版の凡例の二番目に「字數凡ソ十三萬。兵用語二萬餘。醫用語五萬餘。…」とあり、同書増補第十三版(明治38年5月)では「字數十六萬。兵用語三萬餘。醫用語六萬餘」となっている。これらと比較すれば兵事用語の専門辞書としては収録語数は多いとは言えないのではないだろうか。

日本語の訳語は漢字とカタカナを使用している。名詞は頭字を大文字と

し, *m*, *f*, *n* で性別を示しているが, 変化形, 複数形は示していない。見出し語に複数名詞が挙がっている例も見られる(例: **Socken**, *pl.* 襪(クツシタ)。) 動詞には変化形を示さず, 自動詞, 他動詞の区別もない。

正書法は, 上記 1901 年ベルリンにおける「六月会議」の結果に従い, 兵藤著『最新獨和兵語辭典』ではまだ散見された *abmarschiren*, *Heerd*, *Ross*, *Thor*, *thun*, *Thür* といったような綴りは本書では *abmarschieren* 出發スル。Herd 竈, 火爐。Roß 馬, 駿馬。Tor 門, 城門, 關門。tun ナス。Tür 門, 戸, 入口 と改められている。

一部の外来語について, アクセントと発音を部分的にはあるが示しているのはこれまでの辞書に見られない画期的な試みといえよう。これは同著者が『二十世紀獨和辭書』でも採ったように, 音標文字ではなく, ドイツ語の綴りで発音を示す独自の方法である。

例

Chef (*spr.* schäff), *m.* 長, 長官;

Equipage (*spr.* ekipahsch'), *f.* 馬車, 輜重, 行李。

Operateur (*spr.* —töhr), *m.* 施術者(外科)。

Pivot (*spr.* piwoh), *n.* 旋回軸, 樞軸。

rangieren (*spr.* rangsch—), *v.* 並ベル, 編列スル, 進級セシムル;

Routine (*spr.* rutine), *f.* [海] 勤務, 時間割(軍艦)。

Trottoir (*spr.* trottoahr), *n.* 人道, 歩道, 側路。

Troyer (*spr.* troaje'), *m.* 毛製ノ襯衣(海軍語)。

用例の中では, そのままの形で用いる見出し語は長めの で表わし, 見出し語の変化形は全書している。

例

abbrechen, *v.* 分解スル, [騎] 項ヲ屈撓スル;

die Brücke, 橋梁ヲ破壊スル。

in kleinen Abteilungen , 小部隊二分解スル .
zu Einem , 一列二分解スル , 一騎二崩ス .
die Pferde rechts (links) abgebrochen! [騎] 右 (左) 二
項二曲ゲ .

複合語は下記の例のように見出し語に続けて追い込みになっている。

Abend, *m.* 夕 , 晩 , 西方 . **-brot**, *n.* 晩食 . **-dämmerung**, *f.* 薄暮 .
-essen, *n.* 晩食 . **-licht**, *n.* 長庚星 . **-punkt**, *m.* 正西 . **-rapport**,
m. 日夕報告 . **-rot**, *n.* 夕照 . **-sonne**, *f.* 夕陽 . **-stall**, *m.* 夕餉 .
-stern, *m.* 長庚星 . **-stunde**, *f.* 夕刻

こうした複合語の多さで目立つのは **Feld-**で , **-administration**, *f.* 野戦經理 . から **-zwieback**, *m.* 野戦用重焼麵包 . まで 220 ~ 213 頁にわたって 246 語を載せている。この数は、藤山・高田の『獨和兵語辭書』の 118 語に比べると格段の増加である (『成城大学 經濟研究』第 163 号 129 頁参照)。また同様に **Kriegs-**の複合語は **-akademie**, *f.* 陸軍大學校 . から **-zweck**, *m.* 戰鬥目的 . まで 135 語 (藤山・高田書では 113 語) である。他にも **Militär-**では , **-abteilung**, *f.* 軍事部 . 以下 , **-zug**, *m.* 軍用列車 . まで , 161 語が収められている。

『7 最新獨和兵語辭典』で試みた藤山・高田書と兵藤書の **abprallen** から **Abrufung** までの見出し語比較 (『成城大学 經濟研究』第 165 号 31 ~ 35 頁参照) と同様のことを , ここで兵藤書と本書で行ってみよう。

兵藤『最新獨和兵語辭典』
abprallen, *v.* 反跳入。
Abprallung, *f.* 反跳。
Abprallungswinkel, *m.* 反跳角。

藤井『獨和兵語辭典』
abprallen, *v.* 反跳スル 跳發スル .
Abpraller, *m.* 跳發彈 .
Abprallung, *f.* 反跳 , 跳發 . **-s=**
winkel, *m.* 反跳角 .
Abprallwinkel, *m.* 反跳角 .

abprotzen, *v.* 前車ヲ解脱ス。

abputzen, *v.* 整截スル(束柴ヲ)。
網端ノ解ケタル部分ヲ截除
ス。磨ク。掃除ス。梳ル
(馬ノ毛ヲ)。

Abrahamsschoss, *m.* 危険外ニ在
ル觀戰丘。

abraken, *v.* 浮揚セシム(洲ニ膠
住セル船ヲ)。

abrasiren, *v.* 毀平ス。

Abrechnung, *f.* 決算。檢算。

Abrechnungsquittung, *f.* 檢算證
書。

abregnen, *v.* 雨霽ル。

Abreibekappe, *f.* 烙彈擦鐙。

abreiben, *v.* 擦り去ル, 磨キ落ス。

abreißen, *v.* 引キ裂ク。裂キ離ス。
破壊ス。脱ス(蹄鐵ヲ)。
製圖ス。

abreiten, *v.* 乗り疲ラス。

abreiten, *v.* 騁測ス。出馬ス。

abrichten, *v.* 整フ。正ス。訓練ス
(新兵ヲ)。調教ス(馬ヲ)。

Abrichter, *m.* 規正者。訓練者。

abprotzen, *v.* 前車ヲ脱スル。

abputzen, *v.* 整截スル(束柴ヲ),
磨ク, 梳ル(馬ノ毛ヲ)。

Abrahamsschoß, *m.* 危険外ニ在
ル觀戰丘。

abraken, *v.* 浮揚セシムル(洲ニ
膠住セル船ヲ)。

Abrechnung, *f.* 決算, 檢算。-s
=quittung, *f.* 決算證書。
-s=tag, *m.* 決算日。

Abreibekappe, *f.* 烙彈擦鐙。

abreiben, *v.* 擦り去ル, 磨キ去ル。

abreißen, *v.* 引キ離ス, 裂キ離ス。
破壊スル, 脱スル, 製圖ス
ル。

abreiten, *v.* 騁測スル, 出馬スル,
離列スル, 崩ス;

im Schritt ——, [騎]
常騁ヲ以テ崩ス。

abrichten, *v.* 訓練スル, [騎] 調
教スル。

Abrichter, *m.* 訓練者, [騎] 調

調教者。

Abrichtung, *f.* 規正。訓練。調教。

Abriss, *m.* 圖。雛形。草案。設計。

摘要。

abrücken, *m.* 發進ス。退却ス。

Abruf, *m.* 招回。

abrufen, *m.* 召還ス。

Abrufung, *f.* 招回。

教者。

Abrichtung, *f.* 訓練, [騎] 調教。

—s=verfahren, *n.* 調教操作。

Abriß, *m.* 圖, 草案, 摘要, 設計。

abrücken, *v.* 發進スル, 退却スル, 背進スル。

Abruf, *m.* 召還。

abrufen, *m.* 召還スル。

Abrufung, *f.* 召還。—s=schreiben, *n.* 召還状。

これだけを見る限り, 正書法の相違以外は殆ど変わりはない。更に別の頁の Fuchsschecke, *m.* から Führung, *f.* までを比較してみよう。

兵藤『最新獨和兵語辭典』

Fuchsschecke, *m.* 駁栗毛(馬)。

Fuchtel, *f.* 劍。刃。

Fugasse, *f.* 擲石地雷。

fühlen, *v.* 感ス。觸ル。

Fühler, *m.* 接觸兵。

藤井『獨和兵語辭典』

Fuchs, *m.* 栗毛(馬)。—schecke, *f.* 駁栗毛(馬)。—schwanzsäge, *f.* 燕尾鋸。

Fuchsel, *m.* [海] 手撚索。

Fuchtel, *f.* 劍, 刃。

Fuge, *f.* 接手；

fest, , 柄(ホゾ)接手。

fühlen, *v.* 感ズル, 觸ル。

Fühler, *m.* 接觸兵。

Führung, *f.* 接觸, 接肘。

nehmen . 接肘ス。

enge . 密着接肘。

leichte . 輕疎接觸。

die Klingen haben .

鋒刃相觸ル (擊劍ノ)。

mit dem Feinde

halten 敵トノ接觸ヲ維

持ス。

mit dem Feinde

nehmen 敵トノ接觸ヲ取

ル。

Fuhrkosten, *pl.* 運賃。

Fuhrmann, *m.* 運送人。馭者。車

夫。

Fuhrpark, *m.* 車輛縱列。

Fuhrparkskolonne, *f.* 同上。補助

縱列。

Führung, *f.* 接觸, 觸接, 接肘, 連絡 ;

enge , 密着接肘 .

leichte , 輕疎接肘 .

Richtung , 接觸及整頓 .

nehmen , 接肘スル .

mit dem Feinde

halten , 敵軍トノ接觸ヲ

維持スル .

mit dem Feinde

nehmen , 敵軍トノ接觸

ヲ取ル .

Fuhr—

-kosten, *pl.* 運賃 . **-mann,**

m. 運送人 , 馭者 , 車夫 .

-park, *m.* 車輛廠 . **-parks**

=kolonne, *f.* 車輛縱列 .

-werk, *n.* 車輛 ;

einspänniges , 一頭立

馬車 . **-werkgestell, *n.*** 車

體 . **-werkkonstruktion, *f.***

車輛構造 . **-werksbreite, *f.***

車輛幅員 **-werksgewicht,**

n. 車輛重量 . **-werkver-**

kehr, *m.* 車輛連絡 . **-werk-**

führen, *v.* 嚮導ス。指揮ス。

das Kommando . 司令
タリ。司令權ヲ行使ス。

Krieg . 交戦ス。戦
争ヲ爲ス。

den Oberbefehl . 統
帥ス。司令權ヲ有ス。

Führer, *m.* 嚮導者。案内者。長。
指揮官。運轉手(機關車ノ)。

Führung, *f.* 指揮。装填。誘導(馬

wesen, *n.* 車輛學 . -wesen,

n. 輜重 . -zügel, *m.* [騎]

誘導體 .

führen, *v.* 使導スル, 嚮導スル,
指揮スル ;

Krieg , 交戦スル .

den Oberbefehl , 統
帥スル, 司令權ヲ有スル .

das Pferd an der Hand
,[騎]馬ヲ誘導スル .

Führer, *m.* 指揮官, 嚮導者, 案
内者, 運轉手(機關車ノ) ;

berittener , 乗馬指
揮官 .

oberer , 高級指揮官 .

oberster , 最高指揮
官 .

unterer , 下級指揮
官 .

zu Fuß , [騎] 徒歩
誘導者 .

zu Pferde , [騎] 馬
上誘導者 .

-ausbildung, *f.* 指揮官教
育, 指揮官養成 .

Führung, *f.* 指揮, 統率, 統率部 ,

術語)。行狀。

gute 善行。行狀方

正。

schlechte 行狀不正。

誘導(馬ノ), 誘導法, 指導, 指導法, 保持法, 馭法, 行狀;

gute , 善行, 行狀方正。

schlechte , 行狀不正。

mit angefaßter Trense, [騎] 小勒ヲ併用スル誘導。

mit geteilten Kantaren= und Trensenzügeln, [騎] 大勒韁及小勒韁ヲ分チテスル誘導。

mit den vereinigten Zügeln, [騎] 兩韁ヲ以テスル誘導。

Führungs—

Führungsattest, *n.* 善行證書。

-attest, *n.* 善行證書。

-band, *n.* 導帶(後帶)。

-bock, *m.* 誘導架。

-flanke, *f.* 導側。-leiste, *f.*

準稜。-ring, *m.* 誘導箍。

-rollen, *pl.* 摩擦轉子。

-schwelle, *f.* [海] 造船ノ

際假二肋材ニ取付ケタル板。

-stange, *f.* 導桿。-teil, *m.*

Führungsring, *m.* 導帶。銅帶(彈丸ノ)。

Führungswarzen, *pl.* 弾筈。

準爪 . -warzen, *pl.* 弾筈 .

-zeugnis, *n.* 善行證書 .

以上の例で分るとおり、本書は兵藤書に比べ、複合語の増加が目立つほかは、訳語についても殆ど兵藤書と変わりはない。

訳語には () を用いて補足説明が加えられている。例示すれば :

Bastille, *f.* 館城 , 巴里ノ囚獄 (往古ノ) .

Bersaglieri (*spr.* bersallj'eri), *pl.* 狙撃兵 (伊國ノ) .

Franktireur (*spr.* tiröhr), *m.* 義勇兵 (佛國ノ) .

Pferd, *n.* 馬 , 木馬 , [海] 渡り索 (帆架ノ下方ニ在リテ水夫ノ蹈索ニ供スルモノ) ;

Strelitz, *m.* 露帝ノ親衛兵 (十六世紀ノ) .

über — —all! , 集マレ (商船ノ號令) .

適当な訳語がなく説明のみの例もある。

flemisch, *adj.* 「フレミシノ」 ;

—es Auge , [海] 索端ニ絲ヲ捲キ付ケテ作りタル孔 .

Pascha, *m.* 土耳古高官ノ尊稱 , 土耳古ノ軍司令官 .

Yard, *n.* 英國尺度ノ名 (我三尺一寸七厘二當ル) .

難しい漢字や宛字にはカタカナで読み方が示されている。

例

Esche, *f.* 秦皮樹 (トネリコ) .

Ortband, *n.* 鑑 (コジリ) .

Schiemannsgarn, *n.* 合繩 (ヨリナワ) .

Socken, *pl.* 襪 (クツシタ) .

Streu, *n.* 亂藁 (シキワラ) .

Stroh, m. 藁 .

—**wisch, m.** 藁把 (タワシ) .

Talhänge, f. 斜面 (山ノ), 陵夷 (ナダラ) .

Teer, m. 爹兒 (タール) .

Tür— —**klinke, f.** 門鑰 (カケガネ) .

外来語は「 」付きでカタカナ表記。

例

Baryum, n. 「バリウム」 .

Beton (*spr.* betong), *m.* 「ベトン」, 煉石灰 .

Binsenmatte, f. 「アンペラ」 .

Coaks (*spr.* kohks), *pl.* 「コークス」, 骸炭 .

Dynamit, n. 「ヂナミット」 .

Firnis, m. 「ワニス」 .

Panorama, n. 「パノラマ」 .

Schellack, m. 「セルラック」 .

X-Strahlen, pl. 「エックス」光線 .

Yacht, f. 快速船, 「ヨット」 .

Zentimeter, n. & m. 「センチメートル」 .

因みに **Pistole, f.** は 短銃, 拳銃 . であって「ピストル」の訳語はない。

固有名詞は欧州のものは殆ど見出し語にない。見出し語に **bayrisch, adj.** .
巴威里ノ はあっても, **Bayern** はない。次に挙げる例に見られるように,
地名は極東に限られていて, 日清・日露戦役に関係あるものが多いようである。

Niu-tschwan , 牛莊 (地名)

Pa-li-tschwang , 八里庄 (地名)

Pien-niu-lu-putsch, 邊牛録堡子 (地名)

Pjöng-yang, 平壤 (地名)

Siun-yo-tschön, 熊岳城 (地名)

Siu-yan, 岫巖 (地名)

Soel, 京城 (朝鮮ノ). -strom, m. 漢江

Ta-lien-wan, 大連灣 (灣名)

Tschemulpo, 仁川 (地名)

Ya-lu, 鴨綠紅 (河名) * 筆者注: 鴨綠江の誤植と思われる。

Yang-tse-kiang, 楊子江 (河名)

Yen-tai, 烟臺 (地名)

Yin-kou, 營口 (地名)

Yöng-heung, 永興 (地名)

Yu-schu-lin, 榆樹林 (地名)

Berg, m. 山, 嶽

Gefährlicher, 危險山 (山名)

Goldener, 黃金山 (山名)

Großer, 大山 (山名)

Hoher, 二百三高地 (山名)

Eck-berg, 偶山 (山名)

本文に続く 14 頁の附録 (Anhang 1~14) の内容は、以下の通りである。

TRUPPENZEICHEN 1~2 頁

軍隊の略記号を記載するもので、例示すれば次のようである。

A.(軍) **die Armee**. D.(師團) **die Division**. B.(旅團) **die Brigade**.

T.(歩兵) **die Infanterie**. MG.(機關銃隊) **die Maschinengewehr-
Abteilung**

3 頁から 11 頁までの ARMEE-EINTEILUNG mit Angabe der Standorte

der ARMEEKORPS, der DIVISIONEN und der BRIGADEN des DEUTSCHEN REICHES (1910). は、独逸帝国の軍団，師団，旅団の所在地付軍編成である。また，12頁から14頁の DIE STATIONSBESETZUNGEN DER DEUTSCHEN FLOTTEN (1909-1910) には，独逸艦隊の寄留軍港 (1909-1910) が記載されている。

3

奥付の主な記載は以下のようである（図4）。

明治四十四年十二月廿二日印刷	
明治四十四年十二月廿五日發行	
獨和兵語辭典	不夜許聚
著 者 者	藤 井 信 吉
發 行 者	金港堂書籍株式會社 東京市日本橋區本町三丁目十七番地
代 表 者	原 亮 一 郎 東京市下谷區龍泉寺町四丁目十四番地
印 刷 所	東洋印刷株式會社 東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印 刷 者	中 野 鏑 太 郎 東京市南小田原町二丁目九番地
發 賣 所	
金 港 堂 書 籍 株 式 會 社	
賣 捌 所	
各 府 縣 特 約 販 賣 所	

図4

明治四十四年十二月廿二日印刷

明治四十四年十二月廿五日發行

定價金貳圓五拾錢

著 者 者 藤 井 信 吉

發 行 者 金港堂書籍株式會社

東京市日本橋區本町三丁目
十七番地

代 表 者 原 亮 一 郎

東京市下谷區龍泉寺町四
百十四番地

印 刷 所 東洋印刷株式會社

東京市芝區愛宕町三丁目
二番地

印 刷 者 中 野 鏑 太 郎

東京市南小田原町二丁目九番地

金港堂書籍株式会社について，大正元年東京書籍商組合編著の『東京書籍商伝記集覧』には次のように記されている。

金港堂書籍株式會社 東京市日本橋區本町三丁目十七番地 創業
明治二十五年

當社八明治八年原亮三郎ガ横濱辨天町二開店スルニ起因シ、翌九年八月現在地ニ移轉シ明治十七八年ノ頃教科書革新ヲ企テ各種出版スルトコロアリ、同二十五年ニ至ッテ今ノ組織ニ改メ原亮一郎之ガ社長タリ。資本金五拾萬圓ノ株式會社ナルモ、其ノ株主八原一家及ビ同家ノ關係者ノミニテ成立ス。爾來教科書ヲ主トシテ出版シタルモ、明治三十四年小學校教科書ハ悉ク之ヲ他ニ讓渡シ、専ラ中等教科書類、少年書類、文藝書類、教育參考書類及ビ雜誌ノ發行ニ力ヲ注ギ以テ今日ニ及ブ。副業トシテハ清國ニ於ケル出版印刷事業ニ著手シ、上海商務印書館ト合同經營シ、資本金一百萬圓ノ株式會社ヲ組織シ有限公司商務印書館ト改稱ス。

原亮三郎八明治二十年以降同二十六年迄東京書籍出版營業者組合ノ委員ニ當選シ、其間頭取ニ就任シ、又三十二三十三ノ兩年同協議員ニ當選ス。

金港堂書籍株式會社トシテ八明治三十四年東京書籍出版營業者組合ノ協議員ニ當選シ同四十五年一月東京書籍商組合ノ評議員ニ當選ス⁸⁾。

金港堂書籍株式会社の営業部長をしていた藤原佐吉が、退社して明治43年に仙台に藤原金港堂を設立したが、その孫藤原佐一郎の話によれば、金港堂書籍株式会社の創立者原 亮三郎（1848-1919；嘉永元～大正8）は、岐阜出身で元文部省の役人であった。その開業地横浜は、明治初年の文明開化当時は外国船の出入りが盛んで賑わいをみせ、金の入る港であったことから店の名をつけたもので、当時の横浜市内には他にも社名や看板に金港の名をかぶせた店舗が多く見られた。原 亮三郎は、文部省とのコネを利用して、教科書の出版を始めて成功し、一時は全国の検定教科書の6割くらいのシェアを占め、明治の三十年代には1か年の純益が16万円

に上ったという。しかし彼は明治 35 年の教科書疑獄事件で蹉跌することになる。教科書の採択をめぐる出版社・書店・教育関係者の間に増収賄が横行したため、明治 35 年 12 月に当局の手により一斉検挙が行われ、金港堂は家宅搜索を受けて原店主も拘引された。この事件が契機となって教科書の出版から手を引き、以後は単行本と雑誌に主力を傾けるようになったという⁹⁾。

注

8) 影印版『日本書誌学大系 2 東京書籍商伝記集覧』(青裳堂書店 昭和 53 年) 181~182 頁。

9) 『日本の書店百年 明治・大正・昭和の出版販売小史』(尾崎秀樹 + 宗武朝子編 株式会社青英舎 1991 年) 仙台金港堂 67~74 頁

10 最新和獨兵語辭典

1

先に調査した『和獨兵語辭彙』(『明治期の兵語辞書について(四)』『成城大学 経済研究』第 169 号)に続く我が国で 2 番目の、そして現在までのところ最後の和独兵語辞典であり、これ以後和独兵語辞典は出版されていない。著者の兵藤三郎は『明治期の兵語辞書について(三)』で取り上げた『7 最新獨和兵語辭典』の著者でもある(『成城大学 経済研究』第 165 号 18~29 頁参照)。この独和辞典に寄せた陸軍少将大島健一の序文にも、大型の兵語辞典を執筆中であることがほのめかされてあった(同 23~24 頁)。

本辞書についても現在国立国会図書館に収蔵されているものによって記述を進める。大きさは縦 17.5 cm × 横 9.1 cm × 厚さ 2.5 cm, 赤い布地の表紙には金文字で JAPANISCH~DEUTSCHES MILITÄRWÖRTERBUCH

と横書き2行に記され、背にも金文字で上から | JAPANISCH-DEUTSCHES | MILITÄR- | WÖRTERBUCH | 最新 | 和獨兵語辭典 | 兵藤三郎著 | 全 | 兵事雑誌社發行 と記されている。

扉には前陸軍編修兵藤三郎著 | 最新和獨兵語辭典 | NEUESTES | JAPANISCH ~ DUETSCHES | MILITÄRWÖRTERBUCH | von | S. HYODO. | TOKIO, 1912. | 兵事雑誌社發行と記されてある(図5)。そして空白の頁1枚をおいて陸軍大将伯爵乃木希典の題字「約而達」(墨書)がある(図6)。「約ニシテ達ス」と読み下し、「言葉が簡潔で要を得ていて、意味がよく通る」の意味である。出典は中国の五經の一つ『礼記』の

『学記』の「善教者使人繼其志。其言也約而達，微而臧，罕譬而喻，可謂繼志矣。」(善く教ふる者は人をして其の志を繼がしむ。其の言や，約にして達し，微にして臧く，^{たとえまれ}譬 罕にして喻す，志を繼ぐと謂ふ可し。)から。「人を教導することの巧い人はおのずから人びとによって好く受容され，その意志が世に伝えられる。そうした人の教え方を見ると，言葉は簡約だが意味は好く通じ，婉曲だが趣旨は正当であり，比喻を多く用いず直接明瞭に説く。そうであればこそ，教導を受けた人びとによって好く受容され，意志が受け継がれてゆくのである。」¹⁰⁾の意。

乃木希典は嘉永2年(1849)長州

前陸軍編修兵藤三郎著
最新和獨兵語辭典
NEUESTES
JAPANISCH-DEUTSCHES
MILITÄRWÖRTERBUCH

VON

S. HYÖDÖ.



兵事雑誌社發行

図5

金巨類

図 6

事典類

藩士の家に生まれた。明治の陸軍の長州閥に属し、それまでのフランス兵制からドイツ兵制への転換を図る山縣有朋や桂 太郎に同調、陸軍少将だった明治 20 年 1 月から 21 年 6 月までドイツに留学、ベルリンでモルトケ將軍¹¹⁾の下でドイツ陸軍の戦術と軍人教育を学んだ。現地に到着したときはドイツ語を解さなかったが、熱心に学んだ結果ドイツ語で日記を書くまでに上達したという¹²⁾。この辞書が発行されて僅か半月後、自刃して明治天皇に殉死することになるとは乃木自身も思わなかったに相違ない。

次にあるのは陸軍中将井口省吾の序文である。

和獨兵語辭典序

軍事ニ志アル者適切ノ和獨兵語辭書ナキヲ憂フルヤ久シ兵藤君多年參謀本部ニ在テ中外ノ軍事ニ精通シ曩^{さき}ニ好獨和兵語辭典ヲ著シテ大ニ後進ヲ益シ今又本書ヲ編纂シ序文ヲ余ニ囑ス余之ヲ見ルニ新語蒐集ノ勞、字句洗鍊ノ功前者ニ軼^すクル所アルカ如シ是レ豈ニ軍事界ノ爲メニ宿渴ヲ醫スルモノニアラズヤ君學殖宏淵、識見匹倫ヲ絶ス此種ノ事業ハ君ニ於テ蓋シ末技ニ過ギスト雖モ君力博大ノ知識ト富贍ナル經驗トヲ以テ纂修シタル本書力軍事界ヲ裨補スルノ特ニ廣且大ナルベキハ余ノ深ク信ジテ疑ハザル所ナリ乃チ是ヲ序ト爲ス

明治四十五年麥秋

陸軍中將

從四位勳二等功二級

井 口 省 吾

序文注 文中ルビは筆者

軼^すクル：勝る，超える

宿渴ヲ醫スル：久しい以前からの渴望を癒す

匹倫^{ひつりん}：仲間，同輩，同列の人

富贍^{ふせん}：富裕，文才などが十分にある

ひ ほ
裨補スル：補い助ける

井口省吾の名は『明治期の兵語辞書について(二)』(『成城大学 経済研究』第 163 号)で先に考察した『2 改正兵語辞書 獨和對譯乃部 第一』の「改正兵語辞書審査委員」(同上 106 頁)の中にも見えた(当時陸軍大學校教授 陸軍砲兵大尉)が、安政 2 年(1855)静岡県生まれ、陸軍士官学校第 2 期、陸軍大学第 1 期卒業。ドイツ駐在も経験したが、陸軍の主流であった長州閥に反発したことで知られ、明治 39 年 2 月陸軍大学校長に就任して長州閥の教官を追放したことがある。大正 5 年大将、同 9 年後備、同 14 年歿した¹³⁾。

その後陸軍少将河合 操の序文が続く。

序

益友元陸軍編修兵藤君夙ニ公法學ヲ以テ顯レ又獨逸語學ニ精通ス明治三十七八年戰役起ルヤ選ハレテ第三軍司令部ニ公法顧問タリ予亦同軍幕僚トシテ戰陣ノ間ニ伍スルコト一年有餘、親シク君ノ溫容ニ接シ其博學強記ニシテ而モ事ヲ執ル謹嚴ナルハ今尚予ノ敬慕措ク能ザル所ナリ平和克復後君官ヲ辭シ筆硯ニ親ミ蒞蓄セル識見ヲ披キテ曩^{さき}ニ獨和兵語辭典ヲ著シ今又和獨兵語辭典ヲ編纂セラル思フニ目下我國ニ於ケル諸般ノ研究ハ之レヲ獨逸ニ待ツモノ多ク殊ニ兵學界に於テ然リトス而シテ兵語ノ種類タル^{すこぶる}頗ル浩瀚ニシテ之レニ適譯ヲ下スハ常ニ學者ノ困難トスル所タリ君久シク陸軍編修トシテ具サニ此苦難ヲ嘗メ後進者ノ爲此著ヲナス實ニ斯界ノ爲一大光明タルヲ疑ハズ然レドモ世運ノ進歩ハ將來尚補修訂正ヲ要スルモノアルヲ信ズ蓋シ此著ヲシテ完璧タラシムルハ是レ後進者ノ義務ニシテ亦兵藤君ノ厚意ニ酬ユル所以ナラン記テ序トナス

明治期の兵語辞書について（五） ドイツ語を中心にして

明治四十五年五月

陸軍少將

河合 操

序文注 文中ルビは筆者

うんちく
蘊蓄：積み蓄える。

こうかん
浩瀚：大きく広い

河合 操は元治元年（1864）大分県生まれ，上述の大庭少将と同じく陸軍士官学校第 8 期，陸軍大学第 8 期の出で，ドイツ駐在の経験あり，この後大正 4 年には陸軍大学校長となり中将に昇進，同 10 年関東軍司令官となり，大将に昇進，同 15 年後備，昭和 2 年には枢密顧問官となり，長命を保って昭和 16 年歿した¹³⁾。

次に著者自身の独文の序文がある。

VORWORT

Nachdem die kriegswissenschaftlichen Kenntnisse seit der entscheidenden Schlacht bei Sedan fast einseitig von Deutschland nach unserem Vaterlande zugeführt waren und dazu Deutsch-japanische Militärwörterbücher genügt hatten, trat plötzlich eine Wendung durch den letzten ost-asiatischen Feldzug hinein, welche militärische Kenntniszuführen zwischen beiden Ländern gewissermaßen wechselseitig machte. So wurde auch der Bedarf der Verdeutschung Japanischer Kriegskunstsprache hervorgerufen, für dessen Ausfüllung das Militärwörterbuch, welches ich hiermit der Öffentlichkeit übergebe, augenblicklich von einigen Bedeutungen sein dürfe.

Meine Hoffnung, daß dieses kleine Buch auch zu einer Vermittlung des immer besseren gegenseitigen Verstandes beider weit entfernten, energischen Völker dienen wird, würde nicht ganz unrichtig sein.

Außerdem dürfte das Buch zum Gebrauch in Studierzimmern geeignet sein, obwohl es eigentlich als ein vorbereitendes Material für die Verfassung eines großen Militärlexikons verfertigt ist, im Glauben, solche Arbeit bleibe immer noch mancher Anstrengungen wert, solange die Heeresmacht der Aufrechterhaltung des Wohles und der Ruhe unserer Menschenwelt unentbehrlich sei.

Tokio, Mai, 1912.

Verfasser.

大意は以下の通り。

軍学の知識はセダンの決戦以後殆ど一方的にドイツからわが国へ移入されて独和兵語辞典を満たしてきたが、今次の極東の会戦によりにわかに転機が訪れ、両国間の軍事知識は相互交流となった。こうして日本の戦術用語の独訳の需要も生じ、ここに世に問う兵語辞書は当今その要望に応ずるのいささか意義もあるのではなからうか。

この小書が、遠く離れて気力旺盛な両国民の相互理解をいっそう進める仲介役を果たしてほしいとの著者の願いは、あながち不当ではないであろう。

更にまた本書は、そもそもは軍事大事典執筆のための準備資料として作成されたものではあるが、書斎での使用にも向いていよう。軍事力が世界の平和と安全の維持のために必要不可欠である限り、かかる仕事は依然として尽力に値すると信じつつ。

1912 年 5 月 東京

著 者

序文注

Sedan : 普仏戦争でプロイセンの勝利を決定づけたフランス北東部の激戦地
 der letzte, ost-asiatische Feldzug : 日露戦争のこと

次に凡例が2頁にわたって続く。漢字とカタカナで書かれ、一、から七、まで7項目記されている。注目すべきは見出しのローマ字について書いた六、と七、である。

六、在来ノ和獨辭書ハ和漢ノ音韻ヲ記スニ日常ノ稱呼ニ從フニモ拘ラス會、觀、外、丸ノ類ニ限リ之レヲ kwai, kwan, gwai, gwan 等ト爲スモノ多キモ若シ比例ニ依リ音韻ヲ正サハ王ヲ wau, 央ヲ au, 動員ヲ Douwen, 橋梁ヲ keuryau ト爲サ、ルヘカラサルノ類枚舉ニ違アラス然ルニ之ヲ正サスシテ特ニ會觀ノ類ニ限リ kwai, kwan 等ト爲スハ此正音ヲ持フル者尠カラサルニ由ルト雖モ實ハ多數者日常ノ稱呼ニアラサルヲ以テ本書ニ於テハ會、觀、外、丸ノ類モ亦畫一二多數者ノ稱呼ニ從ヒ之ヲ kai, gai, gan 等ト爲ス。

七、國音 wa, wi, wu, we, wo モ亦 wa, i, u, e, o. ト記ス。

これによれば、本書の見出し語のローマ字は基本的にはヘボン式であり、同様にヘボン式を使用した司馬・高田共編『和獨兵語辭彙』との相違は、kwai, gwai を kai, gai と表記していることである¹⁴⁾。

例

司馬・高田『和獨兵語辭彙』	兵藤『最新和獨兵語辭典』
Gwaigan , 外岸 , äußere Graben-böschung, Kontereskarpe <i>f.</i>	Gaigan , 外岸 , Kontreeskarpe, <i>f.</i>
Gwaigō , 外壕 , äußerer Graben.	Gaigō , 外壕 , Aussengraben, <i>m.</i>
Gwaiho , 外堡 , Außenwerk <i>n.</i>	Gaiho , 外堡 , Aussenwerk, <i>n.</i>
	Mantel, <i>m.</i> Barbakane, <i>f.</i>
	Kaisen , 開戦 , Kriegseröffnung, <i>f.</i>

kwaisen , 會戰 , Schlacht *f*

Kaisen , 會戰 , Schlacht, *f*

Kwayaku, Pulver *n*.

Kayaku, Schiesspulver, Pulver,

Treibmittel...

kwai, kwan, gwai, gwan のローマ字表記について、同時代の一般の和独辞典を繙いてみると、明治 34 年 11 月発行の登張信一郎・大黒安三郎・山田 基共著の『新和獨辭典』(大倉書店)ではまだ、

Dangwan , 彈丸 , *s. die Musketenkugel.*

Gwaikoku , 外国 , *s. das Ausland.*

Kwaikwatsu , 快活 , *a. heiter, munter, froh.*

Kwampeishiki , 觀兵式 , *s. die Parade.*

等である。しかし明治 45 年 2 月発行の小田切良太郎・E. ウォールフェールト共編『新譯註解和獨辭典』(富山房)になると、

Dangan 彈丸 *s. das Geschoß ; ...*

Gaikoku 外国 *s. das fremde Land ; ...*

Kaikatsu na 快活な *adj. heiter, fröhlich...*

Kampeishiki 觀兵式 *s. die Parade ; ...*

としている。日本人の口語発音「くわ」、「ぐわ」の「か」、「が」への変化が生じた時期、またその表記の仕方については、一般の和独辞典の調査に際していずれ稿を改めて調査してみたい。

凡例の次の頁は「字解」である。つまり本書で用いる以下の略語が記されている。

<i>adj.</i>	形容詞	<i>adv.</i>	副詞	<i>f.</i>	女性名詞
<i>falsch</i>	誤	<i>Fechtk.</i>	劍術語	<i>imperat.</i>	命令法
<i>int.</i>	間投詞	<i>m.</i>	男性名詞	<i>maritim.</i>	海軍兵語
<i>n.</i>	中性名詞	<i>naval.</i>	航海術語	<i>pl.</i>	複數
<i>Reitk.</i>	馬術	<i>richtig</i>	正	<i>s.</i>	看ヨ

v. 動詞 *veraltet.* 陳腐

注

- 10) 『新釈漢文体系 第28巻 礼記(中)』(竹内照夫著 明治書院 昭和52年) 550~551頁。
- 11) Moltke, Helmuth, Graf von. 1800-1891. 近代的ドイツ軍の創設者といわれるドイツの軍人。当時プロイセン軍の参謀総長。
- 12) 古川 薫著『斜陽に立つ』(毎日新聞社 2008年5月) 217頁参照。
- 13) 『日本陸軍将官辞典』(福川秀樹著 櫛芙蓉書房出版 2001) による。
- 14) 『明治期の兵語辞書について(四)』『成城大学 経済研究』第169号 16~19頁参照

2

本文で、見出しのローマ字はすべて大文字ではじめ、その後に漢字とカタカナで日本語を示す。同音異義語の場合は、見出しを改めず、改行して異なる別の日本語を漢字示す(図7)。

例 **Ashi**, 脚(足), Bein, *n.* Fuss, Schenkel, *m.*

葦, Schilf, *m.* Rohr, *n.*

因みに Bein, Fuss, Schenkel の違いは記されていない。

ドイツ語はラテン字体を用いているが, ß を用いず ss としている(例: Fuss, Spiess など)。しかし綴りは1901年6月のベルリンにおける正書法会議の結果を採り入れていて、『最新獨和辭典』ではまだ散見された -iren と -ieren の混用や th t は訂正されている。発音は示されない。

名詞は性のみを略語で記し、変化形や複数形は記さない。動詞も変化形は示さない。見出し語はやはり圧倒的に名詞が多いが、名詞を含む句や文章もしばしば見受けられる。例えば Ame という見出しはなくて **Ama-gaito**, 雨外套, Regenmantel, *m.* **Ama-gumo**, 雨雲, Regenwolke, *f.* **Ama-oi** 雨庇, Regendach, Wetterdach, *n.* 雨覆, Regenmantel, *m.* **Ame ga yamu**,

雨が止ム, abregnen, *v.* があり, 雨に関係する項目は以上の4つしかない。

長い見出しの例は

Afurika-hokubu-san no uma, 亜弗利加北部(モロッコ, チウニス,
アルゼリア)産ノ馬, Berberpferd, *n.*

Arare no gotoku mitsu-naru, 霰ノ如ク密ナル, hageldicht, *adj.*

Banshō o hai-shite koto o nasu, 萬障ヲ排シテ事ヲ成ス, sich durch alle
Hindernisse durcharbeiten

Bui o kegasazu-shite taijō-suru, 武威ヲ潰サスシテ退城スル, aus
einer verlorenen Festung mit Sack und Pack abziehen.

Kata-zumba isshi aru nomi, 勝タスンハ一死アルノミ, entweder
siegen oder sterben, aut vincere aut mori.¹⁵⁾

Shinsho ni yūbin-gitte o haru, 信書ニ郵便切手ヲ貼ル, einen Brief frei
machen.

Yumō ni tekijin ni kiri iru, 勇猛ニ敵陣ニ研り入ル, eine gute Klinge
schlagen.

比喩的な言い回しも採り入れられている。

Kayaku no nioi o kagitaru koto nashi, 火薬ノ香ヲ嗅キタルコトナシ
(未タ從事シタルコトアラズトノ意) kein Pulver gerochen haben.

Zanshu-suru, 斬首スル, über die Klinge springen lassen.

形容詞例

Arasou-beki, 争フベキ, streitig, *adj.*

Arasou tokoro no, 争フ所ノ, streitig, *adj.*

Bakuhatsu-suru tokorono, 爆發スル所ノ, explodierend, *adj.*

Ben-eki ōki, 便益多キ, günstig, *adj.*

Bōgyo-ryoku aru, 防禦力アル, abwehrfähig, *adj.*

Bōgyo-ryoku naki, 防禦力ナキ, wehrlos, *adj.*

Jinkō no, 人工ノ, künstlich, *adj.*

ナレ, bagdicht, *adj.*
 Arasio konomu mono, 好學者, Hautgen, *m.*
 Arasote toro, 爭て不取, *exstren, v.*
 Arason, 争ふ, streiten, *v.*
 Arason-boki, 争ふべき, streitig, *adj.*
 Arason tokoro no, 争ふ所, streitig, *adj.*
 Arasin, 荒す, verüben, verlieren, veröden, *v.*
 Arasu koto, 荒す事, Verwüstung, Verheerung, *f.*
 Aran, 荒す, abwaschen, aufwaschen, *v.*
 Aran koto, 荒す事, Abwaschung, *f.*
 Are-chi, 荒地, Heide (Haid), *f.* Ödland, *n.*
 Are-chi no kusa, 荒地の草, Heidekraut, *n.*
 Are-ta, 荒田, Brachfeld, *n.*
 Ari, 在り,
 Arimo 在り, beim Heere stehen.
 Aruwa 在り, im feindlichen Feuer stehen.
 Ari-nizo, 地師僧, *Nut, f.*
 Aru, 「アール」 *Ar, m. (n)*
 Aruburehito-kunshi, 「アブルヒト」 蘭方,
 (藥師) Abbrechtstosen, *m.*
 Arumiyūnu, 「アルミユナム」, Aluminium.
 Arumiyūnu-kikyū, 「アルミユナム」 新銃.
 Aluminium-latschi, *n.*
 Asaki, 浅き, seicht, *adj.*
 Asa-nawa, 浅瀬, Garn, *n.* Leine, *f.*
 Asa no bampai, 朝の番兵 (御定) 於午前四時ヨ
 四入時マデ, *n.* Diana, *f.*
 Asa no me, 浅瀬 (淺瀬), Waite (Waite), Fort, Platte, *f.*
 Asashichirin-to, 「アサシチリン」 燈, Aesthenlampe, *f.*
 Asahi, 朝 (旦), Bein, *n.* Fuss, Schenkel, *m.*
 Asahi, 朝, *m.* Kollr, *n.*
 Asahi-tani, 足跡 (通等), *m.*
 Asahi-tai, 足跡, Schenkel, *m.*
 Asahi-ba, 足跡 (工作線) 鋸歯, Seilung, *f.*
 Asahimotokuru, 足跡, 足跡, *n.* auf St. le treten, den
 Schritt markieren.
 Asahi ga kuse auf,
 gehen die Tage aus, 足が痛く (徒歩) 爲す, *n.*, einem

緊急豫約募集

空前の大著述!!! 獨學研究者の福音!!! 好機逸すべからず

[illegible]

最新 辭典 兵 獨 和

大早遣前入馬宮ヲ獲應ニ是時ニ乃ク俄然疾風地カ捲キ雲霧開露ニ發シテ乃ク誰カハ驚歎ス三時ヲ過リテ
我が軍事外ニ稗料ナクハ兵書ヲ讀書クヲ習ズルニ出タルハ夫レ獨ホ大皇
ノ豪胆ヲ萬數千ノ戰略略敵ニ及ビ諸兵科ノ術語語ヨリ飛ハ機
ノ

部七頁藏國

[illegible]

メ 野 戰 上 兵 隊 之 爲 事 也 然 則 戰 場 上 之 形 勢 如 何 乎 茲 將 戰 場 上 之 形 勢 分 爲 三 種 一 爲 戰 場 上 之 形 勢 二 爲 戰 場 上 之 形 勢 三 爲 戰 場 上 之 形 勢

副詞例

Aitai shite , 相對シテ , *gegenwärts, adv.*

Bajō nite , 馬上ニテ , *a cheval, adv.*

Jinshitsu ni , 迅疾ニ , *rasch, schnell, spornstreichs, adv.*

現代の用語と異なる例

Akuhi , 被 , *Mantel, m.*

『兵事雑誌』第 16 年第 16 号 (大正元年 8 月 20 日発行) の折込み頁には ,
『最新獨和兵語辭典』の広告と並んで , 『最新和獨兵語辭典』の緊急予約募
集の広告が掲載されている (図 8)。その広告によれば , 陸軍大将伯爵乃
木希典閣下題辞 陸軍中将井口省吾閣下序 陸軍少将河井 (ママ) 操閣下
序 前陸軍編修兵藤三郎先生著「最新和獨兵語辭典」は , 体裁四六版四十
八断ち , 用字六号字 毎頁三十八行詰 , 七百余頁 , 製本本革製金文字入り
携帯に頗る便なり 正價金參圓五拾錢 小包料内地八錢 清 , 韓 , 臺灣
各三十錢 で , 内容紹介文は下記の通りである。

大旱連旬人馬皆ナ疲憊ス是時ニ方テ俄然疾風地ヲ捲キ豪雨幕營ヲ撲
チ來ラハ誰カ快哉ヲ三呼セサラン我カ軍事界ノ精粹ナル和獨兵語辭書
ヲ渴望スルヤ久シ今本書ノ出タルハ夫レ猶ホ大旱ノ豪雨ノ如キカ兵藤
先生拮据本書ノ編纂ニ從事セラル、茲ニ三十有餘月、兵語ヲ蒐集セラ
ル、二萬數千、戰略戰術及ヒ諸兵科ノ術語ヨリ、飛行機、自動車等最
新利器ノ用語ニ至ルマテ網羅シテ漏サス軍ノ一字ヲ冠セル邦語ノミニ
テモ十六頁ノ多キヲ占メ野戰ノ部七頁戰鬪五頁、要塞四頁、戰時自動車
各三頁 (一頁三十八行) ニ亘ルニ徴シテ其ノ一斑ヲ知ルヘシ故ニ本
書ニ依リ兵語ヲ搜索スレハ會話作文ノ容易ナル譬ヘハ磁石ヲ以テ方位
ヲ按スルカ如ク高所ニ登テ前面ヲ展望スルガ如ク黎明軍ヲ進メ敵ノ側
背ヲ衝キテ其堅陣ヲ陥ル、カ如シ弊社八本書ノ大成ヲ祝スル共ニ平常
ノ愛顧ニ酬ユル爲メ來月二十日迄ニ前金豫約申込者ニ八一割引ニテ提

供スルコトヲ謹テ新進氣鋭ノ軍人各位ニ告ク 冀^{こいねが} ハクハ此好機ヲ逸セ
ズ本書一卷ヲ備ヘテ以テ語學ノ韜略ト爲サレンコトヲ。

広告文注 文中ルビは筆者

拮据(きっきょ): 忙しく働くこと

按スル: 調べる

韜略(とうりゃく): 兵法

広告の中央には内容見本として本文の 329 頁 (**Kōgeki-dōmei** , 攻撃同盟 , *Angriffsbündnis, n. Offensivallianz, f. Offensivbündnis, n.* から **Kogekuri-ge** , 焦栗毛 (馬) *Brandfuchs, m.* まで) が掲載されている。

この広告では乃木に「故」が冠せられていないが、同誌第 16 年第 20 号まで毎号継続して掲載された。「來月二十日迄予約者は一割引」は、第 16 年第 17 号 (9 月 5 日発行) 誌のみ「來」に「九」と朱の訂正印が押してあるだけで、同文のまま掲載が続けられたのである。予約申込み期限についてもおおらかであったようである。

本文は一段横組み、広告の通り 38 行、頁当たり 30 語の見出しとすると **Aberu-kayaku** , 「アーベル」火薬 , *Abelsches Pulver* , から 684 頁の **Zushu** , 圖集 (地圖ノ) , *Kartensammlung. f.* まで約 2 万語となる。つい 3 年前に出版された司馬・高田共編『和獨兵語辭彙』(精華書院)の本文 1 頁 33 行 256 頁で収録見出しの推定約 7 500 語に比べるとかなりの増大と言えよう。広告にいう「軍」の見出しは **Gumba** , 軍馬 , *Kriegsross, Schlachtpferd, n* 118 頁から **Gunzoku** , 軍屬 , *Militärbeamte m* 133 頁までで、確かに 16 頁分を費やしている。飛行機については

Hikō-ki , 飛行機 , *Flugmaschine, f. Luftschiff, Luftmotorfahrzeug, n.(m)* とある。同時代の上述の藤井信吉編の『獨和兵語辭典』では

236 頁 **Flug-**

-**apparat**, *m.* 飛行機 -**arten**, *pl.* 飛行法
-**maschine**, *f.* 飛行機 -**mens**ch, *m.* 飛行者
-**schiff**, *n.* 飛行氣球

422 頁 **Luft-motorfahrzeug**, *n.* 氣球, 飛空機 -**schiff**, *n.* 氣球
-**schiffer**, *m.* 駛空者, 氣球飛行家
-**schiffahrt**, *f.* 氣球飛行, 駛空術

とあり, また, 上述の小田切良太郎・E. ウォールファールト共編『新譯
註解和獨辭典』(富山房)では

304 頁 **Hikōki** 飛行器 *s.* [飛行氣球] das lenkbare Luftschiff ; [飛行
機] die Flugmaschine, der Flieger, der Aeroplan, der Flug-
apparat. ツェッペリン飛行器 das Zeppelinische lenkbare
Luftschiff.

とあるから, 当時はまだ飛行機は氣球や飛行船と区別もされず, ましてや
兵器とは考えられていなかった。因みに世界初飛行の記録とされるライト
兄弟の Wright Flyer がアメリカのノースカロライナ州のキティフォーク
で, 59 秒間 852 フィートの飛行に成功したのはつい 1903 年(明治 36 年)
12 月 17 日のことであった。

また, この広告に「戦時自動車各三頁」とあるが, 217 頁に
Jidō-sha, 自動車, Kraftwagen, Motorwagen, *m.* Automobil, *n.* Selbst-
fahrer, *m.* Kraftfahrzeug, *n.* Wagen, *m.* ohne Pferde.

作業自動車, Arbeitsmotorwagen, *m.*

があるのみで, 「戦時自動車」はない。また, 「自動車」ならぬ「自動車」
のつく見出しは **Jidōsha-dōraku**, 自動車道楽 ... から 218 頁の **Jidō-**
sha-yūgi, 自動車遊戯 ... まで 10 の見出し語が並ぶに過ぎない。明ら
かにこれは「戦時」と書くべき所を「戦時自動車」と誤ったものと思われ
る。「戦時」なら, 476 頁の **Senji**, 戦時, Kriegszeit, *f.* Kriegsfall, *m.*
から, 478 頁の **Senji-zōkyū**, 戦時増給, Kriegszulage, Feldzulage *f.* ま

で、確かに3頁にわたって61語もの見出し(*Senjiku*, 旋軸を除いて)が並んでいるからである。

固有名詞としては次のような地名が取り上げられている。

例

Bazan-ho, 馬山浦, Masampho.

Bokkai-wan, 渤海灣, *s.* Chokureiwan.

Banri no chōjō, 萬里ノ長城

Shinnō-tō, 秦王島, Tsinhwangtou.

Taikyū, 大邱(地名), Taiku.

Taiwan, 臺灣, Formosa

外来語も目立つ。

例

Anchimoni, 安知母尼, Antimon, Spiessglanz, Spiessglas, *n.*

Aruminyūmu, 「アルミニウム」, Aluminium.

Asechirin-tō, 「アセチリン」燈, Azetilenlampe, *f.*

Asufaruto, 「アスファルト」, Asphalt, *m.*

Bentsu-shiki-jidōsha, 「ベンツ」式自動車, Patentmotorwagen
Benz, Beng'Motorvelociped.

Cheperin-siki-hikōki, 「チェペリン」式飛行機, das lenkbare
Luftfahrzeug des Grafen von Zeppelin; Zeppelins Luftschiff.

* Luftfahrzeug は Luftfahrzeug の誤字。

Bisuketto, 「ビスケット」(重焼麵包, 乾麵包, 二度焼き麵包),
Biskuit, *n.* Zwieback, *m.*

Burandē, 「ブランデー」, Brantwein, *m.*

Bawariaōkan-kunshō, 巴威里王冠勲章, Verdienstorden der
Bayrischen Krone.

項目によっては次のように委細をつくしている, 例えば, **Shōkō**, 將校, Offizier, Oberoffizier, *m.* では

乗馬將校, berittener Offizier.

日直將校, Offizier du jour.

當直將校, wachthabender Offizier.

代理將校, stellvertretender Offizier.

派遣將校, abkommandierter Offizier.

員外將校, aggregierter Offizier.

隊外將校, nichtregimentierter Offizier.

休職將校, Offizier auf Wartegeld.

退職將校, pensionierter Offizier, Offizier a. D.

この後に

獨澳兩國陸軍將校の階級, Rangstufen der Offiziere der deutschen und österreichisch-ungarischen Armeen.

として, 獨國と澳匈國の將校の位階表と名称がドイツ語と日本語で掲げられている。

在郷軍人団についても以下のように地域による呼称の違いまで書き記している。

Zaigō-gunjin-dan, 在郷軍人團, Kriegerverein, Militärverein, *m.*

(普國。巴威里。瓦敦堡又ハ「オルデンプルヒ」ノ), Kriegerbund, *m.* (奥國ノ), Militär-Veteranenverein, *m.* (巴威里

ノ), Kampfgenossenbund, Veteranenbund, *m.* (索遜ノ), Militärvereinsbund, *m.* (巴丁ノ), Militärvereinsverband, *m.*

(「メクレンプルヒ」又ハ「ハンプルヒ」ノ), Kriegerverband, *m.* (「ブラウンシュワイヒ」ノ), Landwehrverband, *m.*

(「メクレンプルヒ=ストレリッツ」「ヘッセン」又ハ「シュワルツンプルヒ」ノ), Kriegerkameradschaft, *f.* (「エルザス=ロー

トリンゲン」ノ), Krieger-Landesverband, m.

注

15) ラテン語で「勝つか死するか」の意。ヴィクトリア女王の父ケント公 (Duke of Kent 1767-1820) の言葉とされている。

3

奥付には、明治四十五年六月二十日印刷 明治四十五年六月十五日發行と印刷されてあるのを、太いペンを用いて手書きで、数字を上から、七月十日印刷 七月十五日發行 と訂正している(図9)。国会図書館所蔵の本だけがこのように訂正されているのか、あるいはどの辞書にもすべてこうした作為を加えてあるのかどうか、またその理由も不明である。発売日が予定より遅れただけなのかもしれない。既に見たように、同じ著者、同じ発行所で出版された『最新獨和兵語辭典』の奥付でも、同様の手作業で印刷日と発行日が上書き訂正されていた(『三』)(『成城大学 經濟研究』第165号40頁参照)。

定價は金參圓五拾錢で、司馬・高田共編『獨和兵語辭彙』(精華書院)が七十五錢であるのに比べると格段に高価である。明治43年3月26日の陸軍給与の改正表¹⁶⁾によれば、士官の年俸は少尉で480円、中尉684~552円、大尉1,260~

明治四十五年六月二十日印刷
明治四十五年六月十五日發行
定價金參圓五拾錢
最新和獨兵語辭典奥付
不複製
許製刻
著者 兵 藤 三 郎
東京市本郷區元町二丁目三十三番地
發行者 伊 藤 芳 松
東京市赤坂區表町二丁目一番地
印刷人 山 下 注 連 雄
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社 秀英舎第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
發行所
東京市赤坂區表町二丁目一番地
兵 事 雜 誌 社
電話新橋二六〇五番 振替貯金口座二〇九八七

図9

900円であり、下士官に至っては月額が曹長で營外居住45～25円50銭、伍長クラスになると營内居住5円70銭～4円65銭、營外居住でも16～15円であるから、この辞書を私物として所有しようとすれば、下士官では困難、下位の士官でもかなりの負担となる。

著者と発行者は『最新獨和兵語辭典』と同じであるが、兵藤三郎の住所が「東京市本郷區元町二丁目三十三番地」と変っている。印刷人も「山下注連雄 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地」と変っている。また発行所である兵事雜誌社の電話番号が新橋二六〇五番に変更になっている。

明治時代は明治天皇の明治45年7月30日の崩御をもって終り、大正に移る。本辞典は明治の最後の月に発行されたが、本書以後新たに編纂された獨和・和獨兵語辭典は、次の2点を数えるに過ぎない。

栗本 進著 獨和兵語新辭典 太陽堂 昭和6年1月

高瀬五郎編 獨和海語辭典 Deutsch-Japanisches Marinewörterbuch .

東京水交社 昭和10年2月

軍事において日本が進歩し、ドイツの指導から脱却したこと、また第一次欧州大戦でドイツと交戦したことなどが影響していると思える。

注

- 16)『官報』号外明治43年3月28日に所載の勅令第百四十二號による（復刻版『官報（明治編）』17巻～（4）明治43年3月（下）/第8016号～8028号 株式会社龍溪書舎 1991）。なお、前回（四）で記述した大正9年3月の俸給表（『成城大学 経済研究』第169号 25頁）も参照。

あとがき

本稿の作成にあたり、漢文で書かれた序文については龍谷大学教授藤田保幸氏に教を乞うた。先生のご好意に深く感謝申し上げます。